立教大学のドイツ語
——「入門」～「総合コース」の授業から考える——

神谷　善弘

0．はじめに

立教大学のドイツ語は，今まさに大きく生まれ変わろうとしている。もしも生まれ変わらなければ，やがて絶滅してしまうだろう。そのような危機的状況の中で，1997年度新入生に対して，セメスター制を取り入れた新しいカリキュラムによるドイツ語の授業が開始された。

本論の前半部では，制度的な側面から，立教大学の（ドイツ文学科を除く）ドイツ語科目の全体像を紹介し，後半部では，筆者の担当した1年次の授業の実践例を報告していく。それにより，大学におけるドイツ語教育の在り方の一つを提示することができれば幸いである。

1．言語教育科目としてのドイツ語

新カリキュラムでは，一般教育課程は，「全学共通カリキュラム」に生まれ変わり，外国語科目は，「言語教育科目」という名称に変更された。

多くの大学において，英語以外の外国語が軽視される[1]中で，立教大学においては全学部において，英語と英語以外の外国語が必修である。その理念的な背景に触れることは，紙面の都合上差し控えるが，「1997年度全学共通カリキュラム履修要項（1年次生用）」の50頁には，言語教育科目について次のような記載がある。

「立教大学のすべての学生は，英語を含めて2つの言語を必修科目として履修することになっている。英語は，大多数の学生がすでに中学校・高等学校をとおして学習してきた言語であり，大学では，その基礎の上に立って，各自の目的に合わせて，運用能力や受容能力をさらに鍛え，同時に異文化への理解を深めることによって，国際的な場で活躍できる能力を育成することをめざす。もうひとつの言語は，ドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語・中国語・朝鮮語の中から各自が自分の関心や将来の計画に応じて選ぶものである。これらの言語がめざすのは，英語圏以外の国の人々が築き上げてきた社会や文化，ものの考え方などに言語を通じてじかに触れることによって，異文化理解をさらに深め，多様な視点を獲得することである。ただし，多く

の学生は大学に入ってからこれらの言語を学習し始めるので，必修科目ではまず，この目的を達成するための強固な基盤作りから始めることになる。」(下線は筆者による。)

なお，筆者自身は，「大学で初めて学ぶドイツ語学習の目的は，読解力，会話力，異文化理解の3点に集約できる」と考えている。

2．コースカリキュラム

旧カリキュラムにおける第二外国語としてのドイツ語は，全学部において，1年次週2回，2年次週1回で，合計6単位必修であった。1年次には，2人の教員が授業を担当し，「ドイツ語1」では，読解力の養成に重点を置き，「ドイツ語2」では表現力の養成を目指していた。2年次の「ドイツ語3」は，会話，講読，言語文化のクラスからの選択制になっていた。

新カリキュラムでは，1年次には，ドイツ文学科を除く全学部において前期週2回，後期週2回，2年次には，文学部と法学部の一部[2]は前期週2回，後期週2回で，合計8単位必修であり，経済学部，理学部，社会学部，法学部は前期週1回，後期週1回，もしくは前期週2回[3]で，合計6単位必修である。

1年次には，同一教員による週2回の一括授業が行われ，前期の「入門」は，日本人教員の担当であり，ドイツ語履修者全員が，発音と初級文法のアウトラインを学んでいる。後期には，「コミュニカティヴ・コース（略称：COC)」と「総合コース」から選択する。COCは，ネイティヴスピーカー教員の担当であり，聞いたり話したりする能力を中心に幅広い運用能力の育成を目的としており，総合コースは，日本人教員の担当であり，「読む・書く・聞く・話す」能力をバランスよく育成することを目的としている。

2年次の前期と後期は，COC選択者には，その継続クラスが設定されており，総合コース選択者は，「リテラリー・コース（略称：LTC)」もしくは「言語文化コース（略称：LCC)」を選択する。LTCは，日本人教員担当の週2回の一括授業であり，専門書の読解に必要な語学力を育成することを目的としており，LCCは，主として日本人教員担当の週1回の授業であり，言語そのものを学ぶと同時に，その背景となっている社会や文化に対する理解を深めることを目的としている。

3．教材，評価方法，授業進度

(1) 教　材

立教大学のドイツ語の授業において，統一教材を用いるのは，初めての試みであるので，標準的な文法の教科書と練習帳を採用した。

さらに，ドイツ語教育研究室のオリジナル教材として，「ドイツ語基本用語表現集」が編集された。これは，基本単語集と基本表現集から構成されている。基本単語集は，「初心者には辞書を引かせるよりも，文法事項の学習

に専念させる方が大切である」という考えから生まれたものである。一方，基本表現集は，日本人がドイツ語圏ですぐに使える日常表現のフレーズが厳選され，その機能と使われる状況に従って分類されている。

(2) 評価方法

成績評価の7割は，統一基準試験の結果により，3割は担当者の裁量に任されている。なお，統一基準試験は，中間（前期5月／後期11月）と期末（前期7月／後期1月）に行われる。

(3) 授業進度

授業進度は，学期前の担当者会議で決定される。3～4週間を1つのクールとして，各クールに文法事項や基本表現などのノルマが科せられており，1年間で初級文法の一通りの内容を学習する。なお，授業の展開方法は，担当者に任せられている。

4．授業の展開

授業の展開は，学習内容によって異なるが，典型的なパターンは，次の通りである。

前半（40分）
　挨拶と出欠
　基本表現の口頭練習
　前回の復習
　文法事項の説明と練習
気分転換の時間（10分）
後半（40分）
　文法事項の説明と練習
　数詞の練習
　挨拶

気分転換の時間は不可欠である。高等学校までの授業は，50分前後であり，入学直後から90分の授業に集中させるのは難しい。従って，授業の半ばに気分転換の時間を設け，ドイツの街の風景をビデオ鑑賞したり，ドイツ語圏の人々の暮らしなどの紹介を行い，ドイツ語そのものの学習への集中力が高まるように配慮している[4]。

5．担当教員の独自性

統一された授業進度の中でも，独自性を発揮して，教員は，自らの授業哲学を示す必要がある。その具体例を以下に紹介する。

(1) ドイツ語による教員の自己紹介

筆者は，第1回授業[5]の冒頭に自己紹介を行う。基礎的な表現を用いて，挨拶，入学のお祝い，氏名，出身，居住地，年齢，専攻，経歴，出校日，趣味などを紹介するのである。これには，教員の語学力を証明する，ドイツ語の授業が始まったことを認識させる，学習目標の一つを提示するなどの機能がある。

(2) 動機づけ

第1回授業では，「ドイツ語学習の目的を考える」というテーマで，4～5人のグループによる討論を行わせている。討論の結果を発表してもらい，クラス全体で，ドイツ語学習の意義づけを行っている。

(3) ヨーロッパの地理

授業の目的でもある異文化理解の基礎となるのが，ドイツ語圏の地域事

情[6]である。しかしながら，大学受験科目との関連もあり，高等学校における地理学習者の割合は低い[7]。そこで，第1回および第2回の授業では，ヨーロッパの白地図を用いて，ヨーロッパ諸国の位置とドイツ語圏の確認を行っている。

(4) ドイツ語の歌

「入門」では6月にDie Lorelei（ローレライ）を，「総合コース」では11～12月にStille Nacht, heilige Nacht（きよしこの夜）を取り上げている。詩を繰り返し読むということは，何よりの発音練習になり，それと同時に歌の背景となる歴史や文化に触れることもできる。初めは，恥ずかしそうに見えるが，3～4週間も歌っていると，かなり楽しく合唱できるようになっている。

6．改善へ向けて

1年間の授業実践により，さまざまな問題点が浮かび上がってきた。ここでは，特に重要な点について考えを述べさせていただきたい。

(1) 文法からの脱却

週2回一括授業により，十分な説明と練習が可能となり，文法事項の定着率は確かに高まった。しかし，文法を用いて何ができるようになるのかを明確化することができなかった。1998年度からは，立教大学独自の教科書を使用するが，そこでは，文法事項を精選して，表現力や読解力をさらに高めることのできる授業が展開されなければならない。

(2) 基本表現集の使い方

基本表現集による口頭練習は，文法中心の授業を中和するという役割を果たすと同時に，発音練習としても効果があったと認識している。しかし，文脈から切り離された表現に過ぎないので，今後は，7～8行程度の会話テキストの形式に改善する必要がある。

(3) 試験の形式

筆記試験だけでは，「読む・書く」能力の測定しかできない。「聞く・話す」能力が疎かになりがちである。将来的には，聞き取り試験の統一基準試験への導入を検討していきたい。

(4) 時間割の問題

1997年度及び1998年度の時間割では，文学部と法学部は，午前と午後に1回ずつ授業が行われるが，経済学部と理学部／社会学部は2回とも午後に設定されているのは，バランスが悪い。他の科目との関係はあるのだろうが，一括授業の効率的な展開を促進するためには，午前と午後に1回ずつある[8]のが望ましい。将来的には検討すべき問題である。

7．終わりに

新しいカリキュラムでは，週2回を同一教員が担当することにより効率的な外国語教育が可能となった。教科書は1冊でよく，学生の負担は，軽減され，より集中して学習することができるようになったのである。

教員としても，学生の顔と名前を覚

えやすくなっている。これこそが，教員と学生の信頼関係を築くための第一歩である。実際に，教室以外の場所で名前を呼ばれることに感激する学生も少なくないようであるし，学生に注意を促すときにも，名前を呼ぶ方がはるかに効果的である。

新カリキュラムにおいては，なるべく全ての学生が希望する言語を履修できるようになっており，ドイツ語を積極的に学習したいという学生の比率は高まっているはずである。しかし，たとえ明確な動機があったとしても，学習内容が分からなくなると動機も失われてしまいがちである。また当初は目的が見い出せない場合でも，学習内容が分かることにより，動機も生まれてくるのである。

外国語教育に携わる者は，「学生との世代差を失くすこと」と「分かりやすく熱心に教えること」を忘れてはならないのである。

浅野（1994）は，「近年，大学の自己点検・自己評価が進行しており，授業をめぐる点検・評価が一つの焦点になっていますが，教師たちが相互の実践を交流し，研究しあうことが基本だと思います」[9]（下線は筆者による）と述べている。今後も，数多くの教員に授業探訪を執筆する機会が与えられることを切望する。

(かみや　よしひろ　本学ランゲージ・センター　ドイツ語嘱託講師)

注

1）日本独文学会関東支部主催の「ドイツ語教育研究会」では，1990年から，18大学のカリキュラム改編についての報告がなされているが，国立4校を含む12校において，英語以外の外国語の必修単位は削減もしくは廃止されている。私立4校のみが，変更なし，もしくは増加している。

2）法学部では，英語8単位履修者と英語6単位履修者が混在しているが，後者は，ドイツ語8単位必修である。

3）COC，LTCを選択すると，2年次前期までに6単位修得となる。

4）具体例については，雑誌「立教」第162号，特集「全カリ始まるⅠ—言語教育科目ルポ—」の「ドイツ語（初習言語）」（25～27頁）を参照。

5）浅野（1994）は，最初の授業の演出により，学生のやる気を引き出すことを勧めている。そこでは，①授業のイメージの提出②学生を「ノラセル」③知的なおもしろさを「かいま見せ」ながら④「厳しい」授業であることを示す⑤受講経験者を生かすという点が挙げられている。

6）山川（1997）は，ドイツ語教育に求められる地域事情を基礎事項と主題的事項に分類している。前者には，自然環境，社会環境，歴史環境が含まれ，後者には，環境・リサイクル問題，高齢化社会，民族・人権問題などが含まれる。

7）高等学校では，地理は選択科目の一つであり，山川（1997）による1996

年度入学者へのアンケートでは，地理学習者は全体の約50％に過ぎない。

8）例えば，Guten Morgen！（おはようございます），Guten Tag！（こんにちは）といった授業開始時の挨拶も現実の時刻に即して行える。

9）浅野（1994）：130頁

参考文献

浅野誠：大学の授業を変える16章，大月書店，1994年

山川和彦：ドイツ語圏地域事情の取り扱いに関する一私案，日本独文学会ドイツ語教育部会編，ドイツ語教育第2号，37～48頁，1997年

雑誌「立教」第162号，1997年